

男体山登拝 報告

日時 2012.8.1~8.2

場所 日光連山 男体山

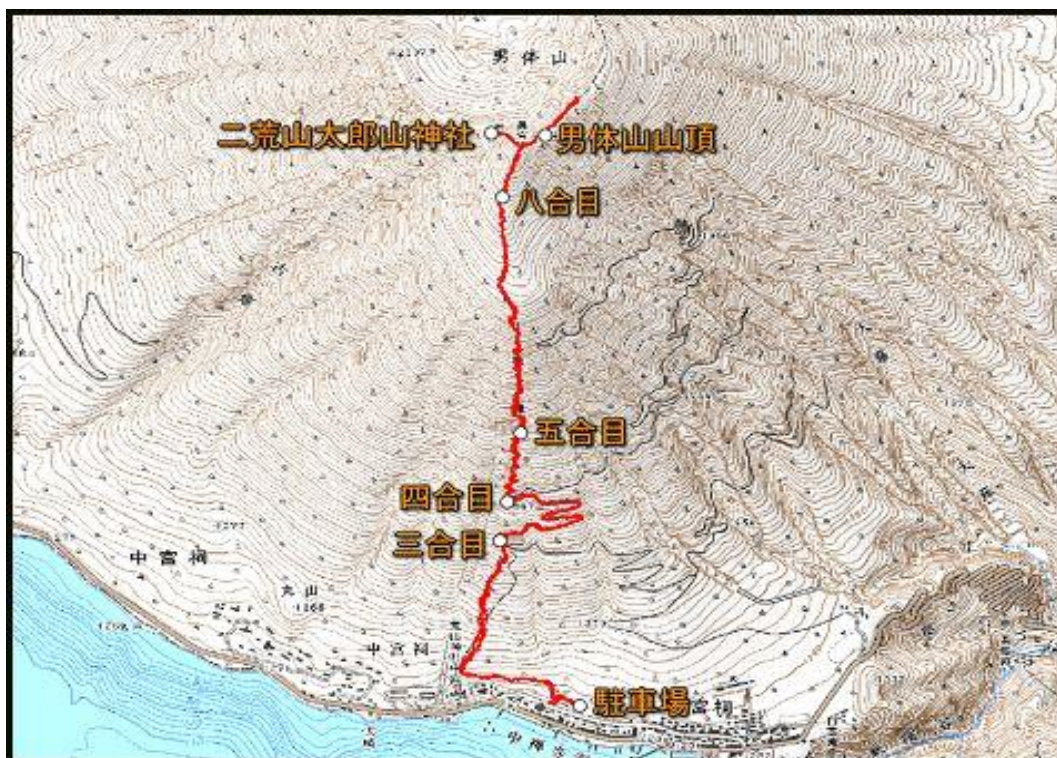
目的 第33~37 登拝

山名 男体山

ルート 正面縦走

メンバー 亀井 報告書著者

ルート図



概要 一日朝 登山開始
二日目 登山終了

男体山の報告書を書いたことはありませんでしたが、
今回、書いてみたいと思います。

計画書では、8/1 午前 0 時より登山開始 下山予定 8/2 の 18 時までの、最大行動時間 42 時間で提出しました。夜間の登山が禁止されている男体山ですが、登拝祭期間中は夜間登拝が許可されております。

新聞にも掲載されたため、さまざまな方々に「なぜ五往復？なんで山に登るの？」と聞かれました。もちろん掲載記事の内容は本当ですが、今までも男体山に登りこれからも男体山に登り続けようと思っている私は、5 往復は通過点であり、なんで登るのかは自分の為です。

予定では 8/1 午前 0 時より登山開始でしたが、諸事情により、朝八時半くらいに登り始めとなります。次の日の 8/2 の三時半くらいに五往復を終えました。行動時間 31 時間です。

水は無くなり次第、境内の龍の口から流れ出ている御神水を補給。

食料は必要な分だけザックにいれ、残りは車中にデポしていました。

装備は最低限。

～一往復目～

朝出発した私は登り始めてすぐ、午前 0 時の登拝祭開門時間に登り、下山をしてくる沢山の方々にすれ違います。登拝開始日の夜間登山者の数は毎年多く、この日が一番にぎやかです。

ほとんどの登山者は疲れきっていて、疲労の表情を浮かべていますが、みなさん達成感と嬉しさからか、清々しい想いで男体山に登りあげたように思えます。私はそんな中で登り始め、みなさん一様に「ご来光は素晴らしい」「頂上までがんばってください」などと声をかけていただけます。

登り始めてしばらく、六合目あたりで、男体山に登り続けている顔見知りの御仁（三百数十登拝）に出会います。その方は、午前 0 時開門より登り始め、御来光を拝めたとの事でした。今年の登拝祭は、最高の天気で、日光の山々はもちろん、富士山や北アルプス、遠くは月山まで見えたそうです。50 年に一度の、素晴らしい登拝祭だと教えていただけました。その御仁は、私が 3 往復するきっかけとなる方で、山中で会うと、「今日は何往復？」などと冗談交じりなどで会話をしています。二人で少し話をしていると、そこに一人の男性が挨拶してきました。御仁は顔見知りのようで、私に紹介していただきました。その男性の名前を聞いて、すぐにわかりました。境内の登拝番付でよく見る男性（百数十回登拝）でした。御仁は、私の事もその男性に紹介をして頂き、その男性も私をよく知っているようでした。その男性は、必ず二往復する方で、境内の受付で二往復分のお守りを買ひ、首

から下げて登っているとのことでした。私は御仁に、「今日は登拝祭で、頂上の社務所が開いています。神主さんがいるので、御挨拶するといいでしょ」と言われ、御仁と別れ、そのまま頂上を目指しました。

その後、男体山登拝番付一位（一千二百数十登拝）の方に出会いました。頑張ってくださいと、握手を交わします。何度も握手をしたことがありますが、その方の握手は力強く、握手をするだけで登山力が上がりそうです。半世紀近く、男体山を登り続けた重みを感じます。

その後ゆっくりと登り、いつも二往復している男性が下山を始めており、すれ違いました。そして、頂上に到着しました。

頂上に着き、奥宮にて二礼二拍手一礼。いつものようにお参りをしました。

社務所の前には、神主さんがおり、御仁より挨拶をしていくように言われた事を伝えると、「それはそれは」と、社務所で休んでいきなさいと言われました。せっかくなので、一体みさせていただきました。神主さんと御仁は顔見知りのようで、私の事も話に出ていたこともあるらしく、「三往復した方でしたか」と驚かれていました。これから下山し、また登りに来ますということ伝えると、無理せず気をつけて行くようにと言われました。

登拝祭期間中は山頂社務所にて、頂上の印を杖に押しただけです。せっかくなので押しただけです。印のお金は納めなくていいので、がんばりなさいと言われました。

下山道も多くの方が登ってきます。こんにちわと、沢山の方と挨拶をしながら歩いています。先ほど会った、いつも二往復している男性とも会いました。男性は、二往復目を登っているところでした。

下山道をひたすら進み、途中、男体山の講員（60数回登拝）の方と一緒に歩いていました。初めて男体山に登ったのは50年以上前で、当時は、白装束にわらじで登るのが当たり前だったそうです。中禅寺湖には、講員の為の宿舎が湖畔に沢山あったそうです。

しばらくして神社に到着します。いつもの感じで、神社の神主さんに御仁に出会った事や、頂上の神主さんに御挨拶をしてきたことを伝え、登拝のお守りを買って、御神水を補給し二往復目を出発しました。

～二往復目～

当たり前前に二往復をしている私ですが、実際、二往復する登山者など、まずいないです。年間で何万人も登る男体山ですが、二往復をしたことある男体山の登山者は、私の知っているだけでも10人いないです。

私も登拝のお守りを二つ首から下げています。時間は12時前後、時間的にも下山者が多く、お昼過ぎから登ろうとしている私に、「今から行くの？」と声を掛けられます。また、「さっき下山していましたよね？」なんて声を掛けてくる方もいます。服装などに特徴があるせいか、私を覚えていて、また登るのですという私に、みなさん非常に驚かれます。

二往復目の登りの途中で、いつも二往復している男性にすれ違います。男性は、今日はよ

い二往復を終えたとのことで、今日は帰宅するとの事です。挨拶をかわし、私は頂上を目指します。

頂上に着き、奥宮にて二礼二拍手一礼。いつものお参りです。

神主さんは、そろそろ来るだろうと社務所の外で待っていたそうです。

二往復目でも休んで行きなさいと言われました。しかし、先を急いでいたため休憩は遠慮し、頂上の印を杖に押して頂き、「持って行きなさい」と福島名物ままだおるをもらい、下山を始めました。印のお金は納めなくてもよろしいとの事でした。

二往復目は、私の後ろには登ってきていた方はいなかったみたいで、下山では登りの登山者とはすれ違いませんでした。その日の最後の男体山の登山者でした。

7合目あたりまで下山を進めると、前方に下山をしている一人の女の子がいました。私が登っていた時に、最後にすれ違った下山者だったので、その女の子には見覚えがありました。お疲れ様ですと声をかけると、私はあえて抜かすことなく後ろを歩いていました。少し歩きながら話をしていると、女の子は私が後ろに歩いていることにありがとうございますと言っていました。男体山は、一本道です。そのため、自分がいちばん最後の登山者だろうということがすぐにわかります。女の子は、私が最後の登山者とわかってみたいので、私が抜かして行ってしまうと自分が最後になってしまうと思い、なにかあったらどうしようと急激に不安になったとの事でした。

たしかに最後の登山者というのは、不安感はあると思います。私は何度も最後の男体山登山者であった事はあるので平気ですが、その気持ちはわかります。この女の子だけでなく、今までも抜かすことなく、最後の下山者と一緒に下山ということは何回かありました。神社の受付で、今日の登山者はもういないですと報告し、少しくらいは神社の方のお手伝いのできればいいなと思っています。

女の子は、湯本の旅館で働いているとの事でした。栃木に来てまだ一カ月くらいで、今日は休日を頂いたそうです。男体山はもちろん初めてで、職場の同僚に、登拝祭というお祭りがやっていて、男体山という素晴らしい山があるから、ぜひ登ってごらんといわれ、登ってみたとの事です。登った感想は、大変だったと言っていました。根性ある性格のようでまだまだ平気だと言っていました。女の子は、福島の相馬の生まれだそうです。震災で色々見たようで、あれ以来、自分らしく生きようと、何ヶ月か働いてそのお金で海外に三ヶ月くらい行くという事をしていると言っていました。つい最近までは、長野の旅館で働いていて、湯本もあと二カ月したら終わりで、また海外に行く予定だと言っていました。下山ももう少しで終わりに近づき、今日は男体山に登れてよかった、また来たいと言っていました。

下の神社に着いたころは夕方過ぎ 18時半くらいで、もう薄暗くなっていました。女の子には、私はまたこれから登るのですと伝えると、驚いていました。私が二往復目だったということも知らせていなかったもので、神社での私と神主さんとの会話で、今二往復目を終えて、これから三往復に行くことを知ったのです。頂上でもらったままだおるは福島のお菓

子なので、もしかしたらままだおるは女の子が持ってきたものだと思います、聞いてみたら、全然違いました。

下の神社では盆踊りがやっていて、お腹が減っていた私は、屋台でソーセージを買い、食べました。ソーセージのケチャップがズボンに付いてしまいました。そこで女の子と別れ、三往復目の登拝のお守りを買って、御神水を補給し三往復目を出発しました。

～三往復目～

三往復目の始まりは、すでに暗い登山道になっていました。普段の男体山の登山許可時間でしたらすでに過ぎていますが、登拝祭期間中なので夜間も登れます。三往復の出発前にきちんと神社の方に了承を得て、登り始めます。

三往復以上の記録は、私が一度と、スポーツの兄弟が四往復という記録しかありません。これは、普段の開門時間内での記録で、神社では「一日何往復」という言い方をしています。つまり、普段は夜間は禁止なので、夏至の一番日が長い日の明るい時間が最大の登山時間になるわけです。私とその兄弟は、一日に三往復・四往復したということです。

なので、登拝祭の期間中に登るということは、一日何往復ではなく、連続何往復となるわけです。そうは言っても、登拝祭の夜間に連続何往復する輩など想定はしてなかったようで、連続何往復という記録は私が初めてでした。

暗闇の中をしばらく歩き、四合目あたりまで来ました。四合目から七合目までは、暗闇と濃霧で、三メートル先はかすんで見えませんでした。正直、とても怖い中歩いていると、闇の中ではガサガサと音が鳴り、数多くのカモシカと思われる光る目が点々と見えます。ピーッと鳴く鹿の鳴き声がすぐ近くで聞こえ、あまりの恐怖に大きな声で叫んだり、石を投げたりして、気を紛らわせていました。恐怖のせいかわ、歩くスピードは速かったようで、七合目まではすぐに着いてしまったように感じます。高度を増していくと、獣の気配も少なくなり、霧も晴れてきました。九合目の森林限界を超えると、満点の星空を独り占めです。休みなく歩いてきたため、少し疲労感がでてしまいました。

頂上に着き、奥宮にて二礼二拍手一礼。いつものお参りです。

頂上には人は誰もいなく、社務所の窓も閉じられ、電気も消えていました。おそろおそろ窓越しに声をかけると、ライトが光り、神社の方が起きてこられました。三往復目も無事に登れたことを心配していただいて、休んでいくように言われました。しかし、8/2 0時の登拝祭開門の時間に下山をしておきたかった私は、杖に印を押して頂き、すぐ下山に入りますと言いました。そして、無理なく下山出来たら、0時の登拝祭開門に合わせ、四往復目をしに、またここへ参りますと伝えました。とにかく無理だけはせず、気をつけて登るようにと言われ、下山しました。

登ってきたときほど恐怖心はありませんでしたが、やはり足どりは重かったようです。

頂上に着いたのが 21 時半前後だったと思います。闇の中歩いて、0時まで下の神社に着くのは少し無理かもしれないと感じていました。

気持ちとは裏腹に、思いのほか霧も晴れ、月の明かりがとても強く、下山道を照らし、導いてくれているようでした。三往復の登り始めの薄暗い時には東のほうにあった月も、今は頭上にて光っています。

下の神社には0時の五分前に着きました。ちょうど、0時より登拝を始める方々のおはらいが行われている中、登拝門より下山してきた私に、その場には違和感しかありませんでした。すぐ0時になり、開門。ぱっと見たところ、50~60人ほど。1000人近く登ったという初日に比べるとかなり少ないですが、平日の真夜中に男体山に登りに来ている方はいます。私は受付にて下山の報告をして、おつれさまでしたと声をかけられました。そうは言っても、ザックを下さず、受付の前に立つ私に、帰宅する様子は見られなかったと思います。雰囲気を感じてか、「行くのですか?」と聞かれ、まだ行けそうですと答えました。神主さんも四往復目ということは分かっているので、多分疲労の色が濃く見える私を気遣って多くを言わず、心配の言葉と、がんばりなさいという言葉をかけていただきました。登拝のお守りを買ひ、御神水を補給し、四往復目は登拝祭開門時間ということもあったので、下の神社で二礼二拍手一礼でお参りし、登ることとしました。

～四往復目～

0時に登山開始です。前方にはヘッドライトが点々と光り、数人の登山者も近くを歩いています。初日の登拝祭開門と比べると少ないと言っても、三往復目の時の誰もいない状態と比べたら、安心感は格段です。夜間ということもあり、特には会話を進める人も少なく、二日目の登拝祭は、一般登山者というよりは信者さんなどが多いようで、もくもくと登っている人が多いように思えました。

登山途中、二人の中年の女性に出会いました。その方たちは、男体山は初めてで、もちろん登拝祭も初めてだとの事でした。軽く御挨拶程度に会話をし、二人とも足どりは遅かったようでしたが、頂上で会いましょうと伝えました。

私も疲労感はとても強くなっていました。休憩回数は四往復目が一番多く、時折杖にもたれかかるように立ち止ってしまうときもありました。それに比例して、時間も大幅にかかってしまい、九合目に着く前にはすでに空が明らんできました。頭上にあった月は、今は西のほうから光を照らしています。あと少し頂上に着く前に太陽が登ってきました。この日も素晴らしい御来光です。確か4時半前後だったので、四往復目は4時間半近くかかってしまったこととなります。頂上に着くと、奥宮にてお参りをしました。

社務所の前では、神主さんと神社の方がいました。お二方や多くの登山者は御来光を眺めていましたが、私は神主さんに社務所で休ませてもらうように言い、一人社務所で横になっていました。眠気はあったのですが寝ることなくぼんやりしていて、社務所は忙しく、登山者がお守りなどを買ったり、杖の印を押してもらっている方もいました。

少し横になったおかげで体は楽になり、神主さんや神社の方と話をしていました。朝の社務所はとても寒く、防寒を持っていなかった私に、熱い味噌汁を作っただけでした。

しばらく話をし、一時間半近く社務所にいました。三往復目の時の恐怖心や、四往復目の意味、なんで往復を重ねたかを真剣に話し、この後、どうするのかを伝えました。

もちろん、またここに来ますと。

そして、杖に印を押していただき、下山へと向かいました。

下山を始めてすぐ、中年の女性二人が登ってきました。二人は、日の出には間に合わなかったが、素晴らしい景色と雲海で、登ってよかったと言っていました。必ずまた来ますと
いっていて、私も必ずまた会いましょうと伝えました。この何時間後にまた出会います。

下山は快調でした。気持ちも体力もほどよく回復し、普段の男体山を登っている時のよう
です。日は高く登ってきて、昨日西に沈んでいった太陽が、今また東に出てきた事に、宇
宙の動きを感じました。

下山を終え、神社に着きました。たしか、八時半前後でした。受付には、神主さんと巫女
さん数人がいて、私を迎えてくれました。少し会話をし、頂上にいる神主さんと神社の方
に、また来ますと伝えた事を言い、五往復目を登り始めようとしている私に、少しざわつ
いていました。あまり長居をしていると気持ちが切れそうなので、出発しますと伝え、お
守りを買ひ、御神水を補給し、登拝口に向かいました。その時に神主さんと少し会話をし
ていましたが、ほとんど覚えていませんでした。

登り始めの階段は、フラフラとふらついていて、肉体的にも限界近くであったのかもしれ
ません。

～五往復目～

道中、一往復目・二往復目・三往復目・四往復目のことが、遠い出来事のように感じてい
ました。ほんの数時間前のことなのに、過去の思い出のような感覚で、でも、はっきりと
した記憶があり、思い出にふけるには記憶が新しすぎて、思考が緩やかにぼんやりとし
ていきました。

休憩はほとんどしなかったと思います。杖を握り続けた手の平は赤くなっていて、膝は上
げるだけですさまじい激痛でした。足の後ろが痛いと思っていたら、後で両足の親指と人
差し指の付け根の皮がはがれていました。常に目の奥がじんわりと熱いような感覚で、す
れ違う人との挨拶の声は小さく、一度も振り返るようなことはありませんでした。

お昼前後くらいに頂上に着いたと思います。

頂上では、神社の方が袴に着替えて待っていてくれました。そろそろ来るころだろうと、
外で待っていてくれていました。数人の方が周りに集まっていて、おめでとうと言ってく
れました。私は神社の方と、奥宮の前で写真を撮り、五往復を達成した記念の写真も撮り
ました。その後、社務所の中で少し話をしていきました。

四往復した兄弟の事や、昔の男体山の話や神社の事など、色々と話をして頂きました。

私も、神社の方に深く深くお礼を言い、自分が健康であることに感謝していますと伝えま
した。

五往復で終わることを伝え、奥宮にて参拝をし、下山へと向かいました。

神社の方に、下の境内にある温泉に入っていきなさいと言われ、境内に温泉があることなど知らない私は、一つ下山中の楽しみが出来ました。

下山道は日差しが強く、ゆっくりゆっくりと下山していきました。

下の神社に着いたのは、15時半前後だったと思います。境内は人はまばらで、特にいつもと変わった雰囲気は感じませんでした。

神主さんに到着を伝えるのと、登拝番付の札を購入しようと受付に行くと、なにやら巫女さん数人が「参られました、参られました」と奥のほうに言っています。いつも顔なじみの神主さんが男性二人と話しており、「おめでとう、おつかれさま、がんばりましたね」とこちらに来ました。神主さんは、素晴らしい記録を出したことに喜んでいて、ぜひぜひ話を聞かせてほしいということと、新聞記者を呼んだので取材を受けてもらえないかと頼まれました。五往復したことで、こんなに神社が騒いでいるなんて想像もしておらず、私も少しとまどってしまいましたが、記者さんにも是非と言われ、写真と取材を受けました。

しばらく話し、新聞に載せますのでよろしくお願ひしますと言われました。

取材後、神社へのお参りを済ませてなかったことが気がかりであった私は、すぐに最後の深い二礼二拍手一礼をし、登拝番付の札を購入しました。取材を受けている間に、神主さんが、連続五往復登拝の記念の一合升を作ってくれていて、さらに五往復登拝を神社が証明しているという登拝証明書を書いて頂いていました。

お礼を言い、温泉に入って行きなさいと言われました。お風呂セットは車にデポしていたので、いったん車に行ってきました。

境内に戻り、神主さんにお風呂場に案内していただきました。お風呂場は女子と書いてありました。男子風呂は清掃中で、こちらでと言われました。

お風呂は誰もいなく、大きい湯船の源泉100%のかけ流しでした。お風呂場には、不思議なホースやシャワーがあり、蛇口などは硫黄でガチガチで、濃すぎる温泉の硫黄を回収していると思われるレジャーBOXは、硫黄まみれでした。壁には、男体山の写真が何枚も飾られ、教訓や訓戒など書かれていました。

ゆっくりとお風呂をいただき廊下に出ると、巫女さんがいて、出口まで案内してくれました。巫女さんにお礼をいい、神主さんに帰宅を告げて帰りました。

～その後～

下山連絡をしました。帰宅の高速道路は、あまりの眠気にだいぶ危険な運転だったと思います。無事に家には着きました。家に着き、すぐに寝てしまいます。

次の日、新聞に掲載されていました。

体の痛みは2日後には取れて、まだ登拝祭期間中だったので男体山に行こうかと思いましたが、休日は娘と一日遊びました。



